

発見!

熊野町の「エエところ」シリーズ 第5回

全国各地にある名所や名物。もちろん熊野町にもたくさんあります。そんな町内に埋もれた、さまざまなモノ・場所などの「エエところ」を紹介するコーナーです。今回は「石神地区」からのレポートです。

28年目のコミュニティー発信地 石神菜園クラブ

「わあああ〜！」小高い丘に歓声が響く。振り下ろした鍬先から大きなジャガイモが現れた。ここは、石神地区から西の平谷川むこう、町の指定巨木の「桑の木」を右手に見ながら歩くこと5分の位置にある「石神菜園クラブ」。

「これはジャガイモ『長崎』ですよ。」と、うれしそうに説明されるのは、今井さん69才。なんと今年で28年目になる「石神菜園クラブ」の代表だ。このクラブで管理している菜園は、どこも十分に手を入れられて、様々な野菜達と作り手の個性が光っている。



前列一番左の今井さんと、この日集まったクラブの方々。

このクラブの立ち上げは、当時の広島県知事、宮沢氏が「コミュニティー振興に一番不熱心なのは公務員と教師だ」と言ったのがきっかけ。県庁マンだった今井さんは「ヨシッ!」じゃあボクからも住んでいる地域でな

にかやろうじゃないか。というノリで始めたんですよ。ちょうど石神自治会が活発だった時期でしたし、当時は8つくらいの趣味のグループがありました。いま、残っているのはこの菜園クラブだけです。と、当時を振り返る。石神地区の20名ほどで、広さ10アール弱の土地を開墾することから始め、ガリ版での会報誌も作った。現在の会員は50代から最高齢84才の方までの12名ほど。開墾当時から残っているのは4名だけだが、このクラブの息の長さには驚かされる。その秘訣はいったい何だろうか?

取材日に集まった9名の会員さんに話を聞くと、どうやら「コミュニケーション」を第一に置いているところがポイントのようだ。とにかく共同での「作業・提案・問題可決」が根付いている。一度集まれば、野菜の話はもちろん、地域の話題から社会情勢にまで話が広がる。日頃からの情報交換もごく自然体で行われている雰囲気。これはまさに、クラブ発足当時を目指した「コミュニティー」が確立している証でもある。

そんな石神菜園クラブにもピンチは何度もあった。会員が40〜50代になり、同時に管理職に就く頃には、仕事が多忙のため、あちこちの区画が荒れてしまった時代もあったとい

う。しかし、この時も、みんなで分担し合ってピンチを脱したそう。

収穫

後の試食会も重要なコミュニケーションだ。取れたてのトマトとスイカを切り分けて皆でほおぼる。「もう、なによりストレス解消になるでしょ?」と、うれしそう話す女性会員さん。ちよつぱり日焼けしたその顔に、とびっきりな笑顔が実に印象的だ。



試食会も収穫の喜びの一つ。

地域社会において、この「石神菜園クラブ」のように、菜園を通じて人と人、集う場所があつて日常自然と顔を合わせる機会が多いことは、なにもものにも代えがたい宝だ。日常から自然と楽しく情報交換。身体を動かし汗をかき、学びながら作物を育てる面白さがそこにはあるように感じた。

「石神菜園クラブ」の菜園は、今が夏野菜の最盛期。28年目の「コミュニティー」も、見事に実っている…。

(記者・伊藤まゆみ)